



♪ Voice & Mail ♪ ボイス&メール



チア・コンベンション 東京会場にて



●ご無沙汰しております。東京基督教大学神学部4年のAです。

去年は、私の面接特訓のために、大変お忙しいところお時間をいただきまして誠にありがとうございました。お陰様で、先日、電機メーカーから営業職として内定を頂き、就職が決まりました。去年の春休みから始まり、毎日就職活動を続けても、なかなかうまくいかないことが多く、悪戦苦闘の毎日でした。ようやく志望企業の内定を頂くことができました。

今後も、良き社会人として活躍できるようにお祈りに覚えていただけますと幸いです。私もチア・にっぽんのお働きに主イエス様の祝福がありますようにお祈りしています。

Aさんの母・ホームスクーラーママのBさんより

17年住み続けた横浜を離れ、主人の母の介護

のため、そして母の救霊のために同居することとなりました。パウロ型自給伝道者の息子のAは就職しつつ、牧師となり、家の教会で礼拝を毎日曜にささげております。特に母の救霊のために、毎日家族で祈り、家庭礼拝をささげています。「あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。…わたしは背負う。…わたしは運ぶ。背負って救い出す」(イザヤ46:4)を心に刻む日々です。チア・にっぽんへの祝福を祈っています。



●広島県立観啓大学に合格できました。様々なアドバイスとお祈り、ありがとうございました。

通信制高校の担任の先生からは、「新しい大学だけど、人気があって難関すぎる。無理だから受験しない方が良い」という感じで言われてい

ましたが、神様の恵みの中で合格できました。感謝です。しかも、入試では、チア・コンベンションで示された通り、「ホームスクーリング」を前面に堂々と打ち出して合格することができたので、さらにうれしいです。

入試の際に提出した小論文「不登校問題は、ホームスクーリングが解決法！」をお送りします。ホームスクーリングについて書いた志望理由書も送ります。

小論文・志望動機書に「ホームスクーリング」を明記したので、面接試験でも「ホームスクーリング」がテーマとなりました。特に面接試験で印象に残った教授からの質問は、「ホームスクーリングを認めてもらうためにはどうしたら良いと思うか？」です。

私は、「ホームスクーリングを社会に認めてもらうためには、ホームスクーラーが認めてもらえるよう社会に出て活躍しなければいけないと思います」と答えました。

教授が小論文を読んで特に良いと思ったのが、最後の文章だったそうです。「しかし、私は逆に質問を返したい。『学校に行けば必ず社会性が身につくのでしょうか』と。学校教育の中で集団行動をすることにより社会性は育まれるという考えは、固定観念ではないだろうか」。この文章

に心から同意し、共感していただきました。

叡啓大学以外に行きたい大学がなかったので、3年前にこの大学ができたのも神様のご計画だと思えます。

私が通ったC通信高校のネットコースでは自由があり、自分のスタンスで学べるのでそれも良かったです。

昨秋まで、私はあまりホームスクーリングのことを入試の面接で強くアピールしようとは思っていませんでした。でも、昨秋のチア・コンベンションの分科会に参加して考えが変わりました。受験の直前だったので参加を迷いましたが、参加して本当に良かったです。さらに、もしLITの奉仕で分科会の録音に行くことがなければ、その分科会に参加していなかったと思うし、「ホームスクーリング」を前面に出しての小論文や志望書、面接等の戦略は与えられなかったです。「ホームスクーリング」に自信を持ち、堂々と入試で打ち出してよかったですし、チア・コンベンションに参加してよかったです。心から感謝です。

これからは周りにはいるホームスクーラーを励ますことを通して、チアやホームスクーラー家族に少しでも協力していけたらと思えます。

(広島 Cさん)

Cさんの入試小論文 「地方の不登校について考える」(抜粋)

私は、不登校を社会課題として選ぶ。教育基本法第一章「教育の目的及び理念」には「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」とある。このことから教育とは、人格形成を重視するものであることが分かる。学校に行くことができない

不登校児童生徒が増えている現代社会の対策として、特に地方の視点から、多様な教育について以下詳しく論じる。

私は、実際に地元広島県三次市の教育委員会に取材を申し込み、不登校の現状について話を伺った。広島県の中でも私の住んでいる三次市は、不登校児童生徒が多い。小・中・高等学校の都道府県別1000人あたりの不登校児童生徒数の上位10位は、都市ではなく地方が多い。三次市でも増えている。

教育委員会が主催している不登校児童生徒



向けの適応指導教室「せきれい広場」にも取材に行った。そこでは、8人ほどの子ども達が利用していたが、親が共働きなどで送迎できない場合、子どもが来ることができないという課題があった。

私は不登校自体が問題行動だと考えておらず、むしろ「学校に絶対に行かなければならない」という考えに必要以上に子どもたちが苦しめられる二次的被害に課題があると考え。文部科学省発行の2017年小学校学習指導要領によると、「また、不登校とは、多様な要因・背景により、結果として不登校状態になっているということであり、その行為を『問題行動』と判断してはならない。加えて、不登校児童が悪いという根強い偏見を払拭し、学校・家庭・社会が不登校児童に寄り添い共感的理解と受容の姿勢をもつことが、児童の自己肯定感を高めるためにも重要である」とされている。

しかし、未だに日本では不登校に対するネガティブなイメージは払拭されておらず、学校に行かない選択をしづらいのが現状だ。そ

れは、良く言えば協調性を重んじる、悪く言えば「出る杭は打たれる」という日本の国民性に原因があるのではないだろうか。

米国では不登校児童生徒数の調査はされておらず、日本ほど社会課題として認識されていない。米国のマサチューセッツ州で現在子育て中の親族に、不登校に関して質問した。すると、日本のように心理的な要因で行けなくなってしまう不登校児童生徒のケースはほとんど聞いたことがなく、その理由として、次のことが考えられるという。州や市、学校によっても制度に違いはあるが、米国は日本と比べて緩やかな学校教育であるがゆえに、先生にとっても生徒にとっても、ストレスが少ない。例えば、米国に在住の親族が通っている公立の小・中・高等学校では、14時30分までには学校が終わる。また、長期間の休みにおいて、宿題が全くない。あるとすれば、読書をする課題ぐらいだという。そして、クラスが少人数制でいじめ対策がしっかりしており、いじめがあった時には先生が必ずアクションを起こすような体制が整っている。学

校に最低1人はスクールカウンセラーが配置されており、相談に乗ってくれるということだ。

また、米国ではホームスクーリングという家庭学習が普及しており、学校に行かない選択肢が充実している。日本では、ホームスクーリングは不登校として捉えられているが、米国ではそうではない。米国では、正確な数は不明だが、2021～2022年には310万人のホームスクーラーがいるとされていて（※NHERI調査）、年々増加傾向にある。米国では、ホームスクーリングは教育方法の1つとして全ての州で法的に認められ、社会的にも広く認知されている。また、アメリカの高校生が受ける全米共通テストの結果をみると、ホームスクーリングの子どもたちは公立校の生徒たちに比べ、およそ20%あまり高い好成績を残している（NHERI・HSLDA調査・チア・にっぽんマガジン34号参照）ということが分かった。

私はホームスクーリングで育ち、現在も通信制の学校に所属しながら高校三年生現在まで続けている、いわゆる積極的不登校児童生徒だ。私がホームスクーリングを始める時には、大きな困難があった。市では初めてのことであったので、両親は教育委員会や学校から呼び出しを受け、何度か話し合いがなされた。今でも鮮明に記憶しているが、何としてでも学校に来させようとする大人達に違和感を覚えた。「集団行動に適応できなくなる。」「お子さんは行きたいと思っているでしょ。」と脅されているように感じた。

ホームスクーリングをしていて一番辛かったことは、人々の目線だった。初対面の方から学校名を聞かれ、ホームスクーリングだと答えると不信感を持たれ、可愛そうだという反応をされる。通信制の高等学校に入ってから、学校に所属していることで差別されな

いという安心感があったが、通信制だと聞くだけで、学校名を聞いたことを申し訳なさそうにする地域の住民に違和感を覚えた。なぜ、ホームスクーリングで育ったこと、通信制に所属しているというだけでネガティブなレッテルを貼られるのだろうか。

私は、ホームスクーリングによって多くの経験や活動をすることができた。旅行も平日に自由に行くことができ、家族と共に日本各地、また海外にも行くことができた。勉強については、自分に合った計画を立て、目標をもって取り組むことができる。私の場合、英語は他の教科より時間をかけ、得意科目として伸ばすことができた。一方、苦手科目も母が時間をかけて教えてくれた。

今回教育委員会の方への取材が終わり、最後に次のように言われたことに驚いた。「なぜ社会性がそんなにあるんですか。ホームスクーリングでこんなに社会性が身につけていて、あなた自身が（ホームスクーリングの教育は）大丈夫なんだよって実証してくれていますね。」しかし、私は逆に質問を返したい。「学校に行けば必ず社会性が身につくのでしょうか。」と。学校教育の中で集団行動をすることにより社会性は育まれるという考えは、固定観念ではないだろうか。

私は、ホームスクーリングは不登校の課題を解決する方法の1つだと考える。都市部のように選択肢の多くない地方でも、ホームスクーリングを誰でも自由にできるようにすれば、本当の意味での不登校児童生徒数が減少するのではないだろうか。そのためにも、ホームスクーラーや通信制などのマイノリティな教育を受けている子どもたちは、先駆者として活躍していく必要がある。私は、何よりも多様な教育の選択肢を認める思想が広がっていくことが大切だと考える。